

ドキュメンタリー映画『Ainu | ひと』上映 6/29

本例会は空席も見当たらない満場の参加者（約35人、うち会員11人）を得て大成功でした。

その発端は、昨年春、株式会社三菱 UFJ 銀行様のご寄付により溝口尚美監督のドキュメンタリー映画『Ainu | ひと』2018 を購入したことでした。

その後、この映画が昨年9月にワルシャワで、11月～今年4月にはジャパン・ハウスロンドンにおける沙流アイヌ文化発信イベントでも上映されたことから、1910年日英博覧会に参加した沙流アイヌと B・ピウススキの交流に思いをはせ、100年前のポーランド・英国と現代の北海道をリンクさせた例会を企画しました。

平取町立二風谷アイヌ文化博物館館長・長田佳宏氏の講演では、この映画誕生の経緯のほか、平取町

のアイヌの方々60数名が取り組んだ、英国における豊かな文化事業「Ainu Stories」展が紹介され、生き生きとした活動に感動を覚えました。

上映の前に、溝口監督とポーランド在住の石塚芳明さん、三和昭子さんによる（ビデオレター）も紹介され、日本とポーランドとアイヌ文化の間の浅からぬ縁と絆を感じました。 <https://youtu.be/xTvR9F-RMXk>

司会を務めながら、いつも以上に意義深く感じた例会でした。講師の長田館長、溝口監督、ビデオレターにご参加の三和さん、石塚さん、そしてご来場の皆様に心から感謝申し上げます。（例会担当 熊谷敬子）

ロンドンで沙流のアイヌ文化を発信する

～1910年と2023年の取り組みを主として～

長田 佳宏

ジャパン・ハウス ロンドン（以下、JHL）と平取町、北海道大学による協働展覧会「Ainu Stories - Contemporary Lives by the Saru River」が2023年11月16日～本年4月21日までの約5か月間、ロンドンにあるJHLで行われた。



1. 展覧会開催の経緯

事業の構想が本格的に動き出したのは2019年で、JHL のキュレーターであるサイモン・ライト氏と北海道大学の加藤博文教授、二風谷アイヌ文化博物館の森岡健治前館長らによって進められた。その際、加藤教授から、ロンドンでアイヌ文化を正しく発信するには、アイヌ古式舞踊やアイヌ語、口承文芸、アイヌ工芸、アイヌ料理など、トータルで文化を発信できる土地柄として平取町が推薦された。

事業の展開にあたって、平取町の目的は、平成31年4月に成立したアイヌ施策推進法に基づき、地域のアイヌ文化を世界発信して住民の誇りにつなげること、二風谷の地域振興に寄与することであった。

その結果、事前打ち合わせと展覧会に関わる地域住民の派遣を合わせて、総勢68名が英国へ行くという大規模な事業となった。約5か月間の展示期間中、163,195人の方々が来場した。オープン前日の内覧会は213人の招待者で賑わい、在英国日本大使館の林肇大使にもご出席いただいた。

2. 展覧会及び関連事業について

展覧会の内容は、主に平取町のアイヌ文化継承の今日に焦点を当て、アイヌ工芸品やアイヌ語、英国と平取の歴史的な関わり等を含めた構成であった。

特に、メイン展示のひとつである平取町民のインタビュー映像は、方形の展示室の壁面に合計12か所

のテレビモニターを設置し順番に視聴できるようになっている。アイヌの民具や歴史事象の展示だけではなく、地域住民の今を英国の方々にはしっかり見てもらえるように意図された映像展示である。

展覧会の関連事業として、11月～3月にかけて平取アイヌ文化保存会、平取町二風谷アイヌ語教室、二風谷民芸組合の方々を英国に派遣し、現地でアイヌ古式舞踊やアイヌ料理、アイヌ語、アイヌ口承文芸、アイヌ工芸の披露、ワークショップ等を行った。Ainu Stories 展関連の様々な事業のうち、平取町民が講師を担ったのは33事業、うち5事業でライブ配信が行われた。会場とライブ配信を合わせて4,856人が受講し、その他にサイモン氏のギャラリートツアーや、平取町のドキュメンタリー映画「Ainu | ひと」の上映も行われた。

3. 1910年の日英博覧会とB・ピウスツキ

一世紀以上前に日英博覧会へ派遣された沙流アイヌ（二風谷村7名、平取村1名、門別村2名）のことも、しっかり語り継いでいきたい。日英博覧会は、ロンドンで1910年5月14日～10月29日の約5か月間、2023年のAinu Stories 展と同程度の期間に行われた。

博覧会の開幕から2か月半後ごろに、プロニスワフ・ピウスツキがロンドンへ出向きアイヌ一行と面会を果たし、その後、10月29日にアイヌ一行が帰国するまでに50以上の物語を記録した。なお、ピウスツキは1903年の夏に約1週間、平取コタンを訪問し地域の暮らしや文化を調査しており、その前後に暮らした樺

太アイヌとの交流も含めた経験が、ピウスツキをロンドンに向かわせた動機と考えられる。

博覧会でのアイヌ一行とピウスツキとの交流の一端を、ピウスツキが書き残している。「私と会話を交わしたことで、彼らは自分たちの尊厳を同じ人類の一員という位置にまで高めることができたとして、深く感謝の意を表していた」という一文は、ピウスツキとアイヌ一行の信頼関係を表すエピソードともいえる。

また、アイヌ一行がロンドンを離れて日本へ帰国する際に残した感謝のメッセージは、ピウスツキが一行から聞きとって新聞社にもちこみ、掲載されたという。そこでは「…この善意の婦人の住む豊饒な国について、それを子々孫々まで私たちの子孫に伝え、語り継がせるつもりでいます」と述べられている。地域で語り継がれた博覧会の逸話は、後の昭和58年に出版された『エカシとフチ』にも掲載され、貴重な記録として今日まで残されている。

4. 一世紀を超えたアイヌの想いをつないでいく

ロンドンでアイヌの文化を紹介するイベントや展示は過去何度も行われているが、沙流アイヌの文化に特化して長期間行われた催しは、日英博覧会と JHL の AINU Stories 展に代表される。

ピウスツキは日英博覧会のアイヌ一行に大きな誇りを与えた。そして113年を経た2023年に総勢68名もの関係者が英国に行き、沙流のアイヌ文化を発信した。

今後、JHL と北海道大学、平取町、平取町民等が協働した AINU Stories 展を、しっかりと語り継いでいくことが一層大事になる。合計68名もの関係者が英国に行き交流した記録が、数十年後には貴重な歴史資料になっていくことが期待される。

一世紀を超え、様々な縁でつながってきた“アイヌの物語”をこれからも大事に伝えていきたい。

(おさだ・よしひろ、本会会員)

◆アンケートの感想より（アンケート 15 枚、質問用紙 1 枚）

<p>素敵な映画をみせていただき感謝です。心が豊かな人達は表情もお話も本当にあたたかい。せっかちに、不満やねたみの中で生活してきた自分を考えさせられました。今まで行ってきた差別を思うとアイヌと関わることがこわかったのですが、後半の交流をみて、過ちを認め、関わりを持ってみたいと思いました。(50代)</p>	<p>ドキュメンタリーの映像が大変貴重で、繊維のとり方や、あく抜きから、さまざまな作業工程など、自然と共生して暮らしていたアイヌの文化を知ることができ、嬉しく思います。森のボランティアなどさせていただいたり、植物調査にかかわっているので、大変興味深かったです。アイヌの着物にもいつか挑戦したいです。(60代)</p>
<p>長田さんの講演:イギリスで“ジャパン・ハウス ロンドン”によるアイヌ関連の展示会があったことも、1910年の日英博覧会も知りませんでしたので、大変興味深く聴くことが出来ました。可能でしたら、スライドを紙資料として配布して頂ければ、更に良いと思いました。(60代)</p>	<p>「遠慮とともに、ではありますが…」いつも神様への敬意を込めてうたい、普通の暮らしを望みながら強い思いを捨てずに生きてきた“人たち”。普通の暮らしが出来ることが平和で幸せであることの、努力の魂の「先人たち」に敬意の気持ちを、改めて深く持ちました。(50代)</p>
<p>なくした母語を再獲得していくこと、自己確認、誇り…となっていくこと。自然は働きかけるものではなく、いただくものという認識。和人が侵略するなかで、どう生計をたててきたのか、生計をかえられたのか、その中で、失いかけたものを再獲得していく営み…(70代)</p>	<p>北海道人です。母の実家(みやげもの屋、登別温泉)のとなりにチセがあり、いれずみを入れたおばあさんがおりました。また、おじが白老のアイヌの人と交流があったようです。このような催し、道民向けに開催すべきだと思いました。ありがとうございます。(70代)</p>
<p>川奈野一信さんが山の木を切るときの話で「皮をもらうんで、山の神さんによるしく頼む」と言ってお祈りをささげるシーンが印象的でした。また、「強制移住は民族の共通の問題」と鍋澤さんが言っていたことも印象的でした。また、言語学習、残っているテープや、記憶のある人たちでの勉強会、大変なことだったと思いますが、とてもとても大切な取り組みだと感じました。(30代)</p>	<p>ジャパン・ハウス ロンドンでの5か年にも及ぶ取り組み全て知りませんでした。100年にもわたるアイヌ文化への関心〜ピウスツキという歴史の中の人物が今によみがえったようで感銘をうけました。ありがとうございました。『Ainu ひと』今を生きる AINU の人々の姿を垣間見させて戴きました。子供たちに伝わっていくのも嬉しいことでした。(70代)</p>
<p>JHL での展示では、現地の人々がアイヌへの関心、少数民族の言語を残すという面でも関心を持っていたということを知った。また、『Ainu ひと』の上映では、バックグラウンドは違えど。同じ二風谷という地でアイヌ文化の発信を続ける4人、また、それを通じてアイヌ文化の継承をする人々の思いを知ることができる良い作品だったと思いました。(20代)</p>	<p>本日は貴重なお話、映画を拝見する事ができ、とても勉強になりました。1910年のロンドン日英博覧会から113年という長い年月を経て、また日本のアイヌ文化を世界の人々に知ってもらえる機会ができた事、とても重要で意味のある展覧会だったのだと思います。今を生きているアイヌを、私達の世代ももっと学んでいきたいです。(20代)</p>

いていても眼光鋭く、当たり前のことを当たり前と、見過ごすことなく観察いたしました。当たり前ですが、当たり前でいられることは、なんと素晴らしい僥倖でないでしょうか。一個の爆弾も、大地震も、たちまち私たちの平安を壊してしまいます。死の迫る病者にとって、なによりも平安は大切なものです。

畑、蛙、ボウフラと我慈雨を待つ

ボウフラはやがて蚊になって人畜に害を与えます。それが、畑という食料生産の場と、「古池や蛙飛び込む…」の愛らしい蛙と「我」が一緒に並べられているところがこの句の目玉でした。私たちは「万物の霊長」として、利害で生き物の生命と奪を決めています。水が命の「我」もそれらと一緒に、大地への慈雨を希求しています。生物の命の平等感が主眼の句ですが、ユーモアがあります。

物忘れ梅つこ散ればほけが咲く

「ぼけ」は「木瓜」と「呆け」を掛けていますね。認知症は人生50年の時代には見られないものでした。長

寿が当たり前の時代です。ユーモアでもって、自分の老化と向き合えるように、日頃からの準備が必要です。「物忘れ」は高齢になれば、誰にでも見られることで、必ずしも認知症の前兆ではありませんけれど。

蟻うごき農夫もうごく日向かな

「蟻動き」と漢字を使つては絶対いけないところですか。「うごき」とすると小さな蟻の懸命な動きが、そして年食った農夫の広大な大地に取り付いて働いている姿がよく表われてきます。「日向」としたのは霜田さんのやさしさの現われです。「日向」はやわらかな言葉です。「日差し」はいかにも強い日光を思わせ、霜田さんはそれを避けたのでしょう。

霜田千代磨さんに、こんな句もありました。「うらめしや子持ち鯛(はたはた)口あけて」動物はほかの生き物の命を貰って生きてゆかねばなりません。それを「業」としてとらえるのは仏教になじんだ私たちに特徴的なことのように思います。

良い機会に恵まれました。深謝いたします。

(だけ・ふみひこ、現代俳句作家・詩人、本会会員)

北海道医療大学とルブリン国立医科大学の学術交流

2024年6月中旬、ルブリン国立医科大学との学術交流の一環としてマリア・ミエルニク=ブラシュチャク教授=写真右=が北海道医療大学(当別町、札幌市)を訪れました。同教授は小児歯科を専門としています。訪問時には当別とあいの里のキャンパスを訪れ、日本の歯科治療に関する現状を把握するとともに、ポーランドの小児歯科に関するセミナーを行いました。

滞在中の休日には、支笏湖や積丹半島にも足を運び、かつてないほどの好天に恵まれたこともあり、北海道の自然の美しさに魅了されていました。

本年9月には、北海道医療大学歯学部 of 古市保志学部長がルブリンを訪問する予定です。また、心理科学部分野での協力も期待されており、今後の両大学間の関係発展が楽しみです。

(シルヴィア・オレーヤージュ、佐藤圭史

Sylwia Olejarz, Sato Keiji, 北海道医療大学)



【5月よりつづく】 《第112回例会》『Ainu | ひと』上映 ◆アンケートの感想より

<p>日英での報告で、130年の時をへて現代の人が英国を訪れた話を聴くことができ良かった。また、現代も平取町では、文化が守られているだけではなく、復活して、現代も生きて発信されているのはどうしてかを映画から知る事ができてとても良かった。(50代)</p>	<p>平取の春夏秋冬を通し、そこに累々と根づいて来たそれぞれのAinu ひとたちの生活、祈りが画面の中から感じられ、改めて文化や民族を継承していくことの大切さや難しさを理解させて頂くことが出来た作品だと思いました。より多くの人たちにこの作品を見てもらうことにより、アイヌ文化を理解する機会になるものと信じます。良い機会をありがとうございました。</p>
<p>ドキュメンタリーは、なかなかの力作。アイヌ文化の中核となる「アイヌ語」を伝えることが、いかに大切か、再認識しました。先住民の権利について国際的な連帯をもっと強めてほしい。(70代)</p>	<p>映画が終わった後、彼らの自然との共生、他者との共生という考えに共感と癒やしを感じました。美しかったです。祖先から受け継がれてきた自然(神)に対する敬いの心と深い知識をもって自らも自然の一部として生きていっしやる。アイヌ文化を次代に引き継ぐことは簡単ではありませんが、日本の重要な文化として引き継ぐことが必要だと思いました。しかしアイヌの方々に対する差別は過去のことではなく、現在進行形の問題です。それで言うと、4人の登場人物のなかでお若い方の経験に基づく発言が最も重要で、そのような経験をする事のない社会を創ることがアイヌも含めた私たち全員の責任だと考えます。(60代)</p>